



長津一史、『国境を生きる——マレーシア・サバ州、海サマの動態的民族誌』木犀社、2019、481p.

フィリピン、マレーシア、インドネシアの国境を挟んで、スル海をふくむウォーレシアに広く散らばって生活している海の人がいる。本書が取り上げるのは、そのなかで海サマ（人）と自称する人々である。（著者作成の図2-1 サマ人の人口分布図参照。）交易の港市を拠点に発展した王国の史書・物語、西洋人の旅行誌、スペイン、英国、オランダ、アメリカの植民地記録などにも断片的に報告されている。第二次大戦後、インドネシア、フィリピン、そして最後にマレーシアが独立をはたし、国境、国籍、国家・地方行政や開発の影響がこの人々にも強くあらわれてくる。同時に、1960年代から新しい世代の人類学、地理学、歴史学のトレーニングを受けた研究者によって調査研究が蓄積されてきた。また海サマにかかわらず、海民、海域世界の優れた民族誌など研究書が21世紀に入って日本でも刊行されている。これらの先行研究への行き届いた目配りは、著者の参照した文献、法令、行政・政党資料・センサスなど公文書等資料リストからうかがえる。

本書はこのような文脈のなかで、スル列島の西南端に位置するボルネオ（島）北部、東マレーシア・サバ州南西のセンボルナ郡において1997年から99年に行われた臨地研究に基づいて、「国境と対峙しながら国境を生きる人びと」の変容過程を描いたものである。著者は、それ以前に、センボルナから90キロほど離れたフィリピン領（スル列島南端に位置する）シタンカイ（島）で臨地研究をおこなっており、調査村に入る際には、このシタンカイの友人の縁者（元をただせばシタンカイからセンボルナに移民した海サマ）を頼って、ある意味では、理想的な入村の仕方をしていることにも注目したい。

本書の構成は〈はじめに〉、〈序〉、〈一章〉が導入部としておかれていて、次に3部からなる本論

が、能楽の序破急のようなテンポで展開される。〈結び〉の後に付録があり、著者自身の作成した悉皆調査世帯構成表、地縁の親族群（ロオク）別統計表にくわえて、海サマ起源説話（サマ語日本語対訳）、村で使われるイスラーム教本のサマ語（アラビア語表記）タイトルと概要、「礼拝の13柱の効用」（原文、ローマ字転写など）が収録されている。

〈はじめに〉と〈序〉では、「国家と対峙しながら国境を生きる人びと」の「動態的民族誌」を提示するにあたって、3部構成の具体的課題を明らかにしたうえで、著者の研究の視座、調査の概要、用語を説明している。第一章「フィールドワーク」では、調査村への入り方、調査環境、そして導入、試行、能動と著者が名づける調査過程を記録している。序、一章は、本書の梗概であると位置づけることも可能であるが、最初の70ページまでは、重複するところもあり、付録として取りあつかってもよいような部分もある。

第I部「民族の生成と再編」は第二章「海サマとはどのような人びとなのか」からはじまる。タイトルのわかりやすさに比べ、内容は、言語からみた「民族」の分類、スル諸島における民族表象の紹介に続き、海サマ社会の歴史的起源説話、親族組織、儀礼、宗教について、第2次世界大戦後の研究が概略的に紹介されているだけで、はて？ どんな人という疑問には、答えていない。第三章において、サマという「民族表象」がスル海域で生まれたものであり、経済的・政治的に周辺に位置するとともに、さらに陸サマと海サマの差別化が生じてくる歴史過程を第二章より詳しく説明している。三章の後半は、植民地期北ボルネオ時代とマレーシア・サバ州となってからの政治史が簡単にふれられて、最後にマレーシア2000年度センサスにおけるサバ州とマレー半島部の民族別人口が紹介される。

第四章は、サバ州における（海賊、漂海民、ムスリムというイメージをめぐって）サマ民族表象の変容を日常的な語りと公的な表象との相互関係から捉える。北ボルネオで活動するスル起源のサマは、ブルネイ・ムラユからバジャウと呼ばれていた名残で、植民地時代の資料でもバジャウ名称

が使われている。バジャウは「原住 native 民」と公的に（英国領時代のセンサス報告類で）記録され、1951年の北ボルネオ・センサスでは、「主要な（三つの）先住 indigenous 民」の一つとして明示されるに至っている。1963年の独立後は、スルでの被差別を脱して、バジャウもプミブトラ（1980年代から流布する政治的カテゴリーで、マレーを含む先住民）と認められるようになり、「サバ版マレー」として（フィリピンでは蔑称であった）バジャウ名称を使うサマも増えているという。フィールドワークでの日常的な実践の観察や事例にもとづいて、表象する側と表象される側との相互作用の中に定位された語りとして現れてくる民族表象のダイナミクスを明らかにしている。

1950年代からセンボルナ郡に定着した海サマという人びとは、独立後政府が関与する開発プロジェクトを通して、国家・行政と深く関与しだし、自らのアイデンティティ・社会の在り方を主体的に大きく変容させていく。第Ⅱ部の最初、第五章で、センボルナ郡の中心であり、調査村のあるセンボルナの町（プカン）の社会的分断と政治的権威の再編成過程を再現し、第六章では、船上生活時代のもやい拠点から大規模な杭上集落に発展した調査村に焦点を合わせて、その現況、人口、そして歴史的に遡って移民／難民の差別化、政治的権威の形成と変容を跡づける。第七章「開発と国境」では、六章の分析で析出された「先住者」と「移民」という「集団分類」と、自己／他者表象の様式が、「社会的に実体化」する状況を活写し、それがじつはアイデンティティのゆらぎであると結論する。

第Ⅲ部では、サバ州での公的な規制になじみながら、それをしたたかに利用して生きていく海サマの社会変容が4章にわたって論じられる。マレーシアの半島部で1970年代前後から「イスラーム化」がますます顕著になり、1980年代になるとグローバルなイスラーム復興の波を受ける。第八章では、このような状況の下で、サバ州において法、行政、教育のイスラーム的制度化が進行する有様を主として公的データでくわしく紹介している。第九章は、それに反応する調査村での宗教をめぐるポリティクスが、イスラーム教本（パルクナン）の分

析を含めて、具体的事例に即して論じられる。公的な回路を通じたイスラーム化によって「正しい」ムスリムとして承認させ、（陸サマなど海サマを差別視していた）他のムスリムから差別されない社会的な地位を獲得しているというのが論点である。

次に、第一〇章と第十一章において、海サマにとってのイスラーム化の社会的意味をふまえて、イスラームと伝統的慣習（アグダト）との相互関係を軸に宗教実践の変容を考察する。ポイントはイスラームの視点から変容を眺めるのではなく、海サマの人々の主体的な信仰、それに伴う儀礼に焦点を当てていることである。

第一〇章では、1960年代にみられる「伝統的な」信仰とそれにそった儀礼の棚上げを行い、当時の村のイスラーム指導者が「アグダト（慣習）とみなす」儀礼と「おおよそイスラームに従っていると認める」人生儀礼との分類を提示する。イスラーム化に伴って、儀礼が行われなくなった理由と背景が概略的に説明される。

第十一章では、衰退する伝統的な祖霊儀礼（マゲンボ・バイ・バハウ）とイスラーム受容後導入された死者儀礼（マガルワ）の二つの儀礼に焦点を当てて、観察事例における参加者、主催者、イマム・霊媒などの執行者の系譜関係、居住空間などがくわしく分析される。

マゲンボというのは、祖先霊（ンボ）をまつことで、祖先霊にバイ・バハウ（陸稲の初穂）を供える儀礼である。1960年代に船上生活が中心であったタウィタウィの海サマを調査したアメリカの人類学者は、タウィタウィ、シブトゥ、センボルナを結びつけるこの儀礼のネットワークが、海サマを他から区別する下位文化（バンサ）になっていたとまでいう。（H. Arlo Nimmo, *Magosaha: An Ethnography of the Tawi-Tawi Sama Dilaut*, Ateneo de Manila University Press, 2001, p. 168. [magosaha はサマ語で seeking a livelihood の意味]）このネットワークは実証されているわけではないが、この儀礼が海サマの中心的な宗教実践であったことは確かなようである。このもっとも重要であった儀礼の衰退とそれにもかかわらず持続される過程で、海サマのあいだに社会的分断が生じているという著者の指摘は重要である。著者はマゲンボ儀礼を

「初米儀礼」と呼んでいるが、稲魂（ンボ・パイ）に対する儀礼と間違われかねないので、筆者は祖霊儀礼とよびかえた。本来の意味での新嘗祭とする方がよいのかもしれない。

二つめの死者（霊）儀礼は、調査時に盛んにおこなわれるようになった儀礼で、イスラームの霊魂概念にもとづいて死者霊（アルワ）の平安を祈る儀礼と説明される。「イスラームの正当な実践」であるとされ、公認イマムによって儀礼が執行される。しかし、一般の海サマの言説ではアルワを伝統的なスマガトと同一視し、マガルワ儀礼を「スマガトに食事を供する儀礼」と呼んでいる。儀礼の解釈の「多声性」が事例に即して指摘される。公的イスラームが浸透するなかで、マガルワのように儀礼が再構築されるのは、ムスリム意識が「オブジェクト化」される結果もたらされた、「非組織的ではあるが創造的かつ能動的な宗教実践面での適応」であるという。

〈結び〉では、Ⅰ部、Ⅱ部、Ⅲ部の梗概の形で、著者の意図、本書が示唆する研究の方向について丁寧に述べられている。民族誌としての特色をあえて挙げれば、人類学者 Clifford Sather によって同じ村における、1964/65年の住み込み調査、74年と79年の短期フォローアップ調査に基づくデータが利用できたことであろう。著者は彼と緊密な連絡を取って、彼の成果を本書で活用することによって、サバ州の国境社会に生きる海サマの（二度と繰り返されることがないであろう）社会変容過程を実証的に描いた動態的民族誌とすることに成功している。しかし、筆者は本書を「民族誌」と呼ぶのに躊躇する。それは、海サマの先行研究によって取り上げられなかった第Ⅱ部の開発過程、第Ⅲ部のイスラーム化の問題を主テーマとすることにより、島嶼部東南アジアにおける「宗教の政治」や「開発の政治」を周辺の視点から比較考察する地域研究の枠組みを提供しているからである。本書を基点とすることによって、島嶼部東南アジアの比較研究への新たな道を開いたといえる。

国境を生きる海サマとはどんな人なのかという疑問で始まる本書を通して読み終えると、特にたくさん観察事例の語りを通して、海サマの生き様が身近に感じられるようになる。梗概では伝え

られない、細部の観察がマクロな理解に光をあてる作品となっている。それだけに、正誤表は付いているものの、誤記、脱落が残っているのは残念である。

（立本成文・総合地球環境学研究所顧問）

斎藤照子、『18-19世紀ビルマ借金証文の研究——東南アジアの一つの近世』京都大学学術出版会、2019、xi+367p.

本書は、コンバウン朝ビルマで庶民層も含め広く用いられたテッガイッと呼ばれる各種証文を史料として、当時のビルマ社会における人と土地をめぐる契約関係、さらにそうした契約関係を支える社会の在り方について考察した重厚な研究である。テッガイッは、黒色の厚手の紙で作られた折り畳み写本や、椰子葉を乾燥させた貝葉に書かれ、僧院などを中心に保存されていたものが、現在では図書館等公共機関に移管され、またマイクロフィルムでの収集やウェブ上の公開により、広く利用可能となっているという。しかし著者によれば、テッガイッという言葉について知る人の数は日本ではようやく二桁、本場のビルマでも「100人に届くかどうか」ということであり、本書は従来十分に知られてこなかった地方史料を本格的に活用した、世界的に見ても先駆的な実証研究と言えるだろう。中国史を専門とする評者は、ビルマ史に関しては全くの門外漢であるが、以下、テッガイッと同時期中国の契約文書との比較にも触れつつ、本書の内容を紹介してゆきたい。

序章において設定される課題は以下の如くである。第一に、可能な限り広くテッガイッを渉猟・読解し、借金証文という視点から18～19世紀ビルマ王国に進行していた社会経済的变化をとらえ、その背景と歴史的意味を明らかにすること。第二に、テッガイッが契約として社会的に認知され、契約の当事者双方にその履行を促すことができたのはなぜか、という問いの答えを求めること、である。大きく4部に分かれる本論のうち、第Ⅰ部から第Ⅲ部は主に上記の第一の課題に答えるものであり、第Ⅳ部は第二の課題を扱う。